

【書評】

初期アナーキズムの現代的意義

——森政稔著『アナーキズム——政治思想史的考察』作品社、321頁、
2023年、ISBN978-4-86182-706-8

宮崎大学テニュアトラック推進室講師

松尾 隆佑

はじめに

本書は日本の政治思想史研究をリードしてきた著者の多年にわたるアナーキズム研究を集成した一冊であり、ウィリアム・ゴドウィン、マックス・シュティールナー、ピエール＝ジョゼフ・ブルードン、ベンジャミン・タッカーといった複数の「アナキスト」を思想史的読解の対象とした、日本では稀有な業績である。

グローバル資本主義への抵抗と違和が高まるにつれてアナーキズムは一種の流行思想と化しており、アナキスト人類学を標榜したデヴィッド・グレーバーの著作が広く読まれているほか、関連書籍の刊行が相次いでいる。しかしながら、日本の政治学においてアナーキズム研究は長く低調でありつづけてきた。2021年には日本学術会議が「政治学におけるアナーキズムの意味——社会と国家を捉え直す」をテーマにシンポジウム（報告者は梅森直之、重田園江、山崎望）を開催するなど、状況は変わりつつあるものの、政治思想史叙述においてアナーキズムが占める位置は未だ周縁的である。

そのため本書は、キャリア初期からゴドウィンやブルードンに関心を寄せてきた例外的な政治学者によって思想史的に描かれるアナーキズム理解の到達点であると同時に、今後の政治学にアナーキズムをどのように位置づけるべきかを検討する上で、最良の出発点だと考えられる。政治理論や法哲学では、国家の最小化を目指すリバタリアニズムや、市場メカニズムに基づく無政府社会を

構想するアナルコ・キャピタリズムが一定の関心を集めてきた。また、個々の国民による同意なく命令・強制を行う国家の正統性を否定する哲学的アナーキズムも盛んに論じられている（瀧川 2017: 4-5, 192-196）。こうした理論的営為にとっても、本書が指し示す歴史的財産を吟味することは有益だろう。本稿は書評の形式を取り、政治学徒が本書から引き継ぐべき成果と課題を整理したい。

1. 構成と概要

本書は既発表論文を収録した7つの章を4部に分けているが、書き下ろしの序章、中間章、終章をあわせると全10章から成る。本論の初出が1986年から2015年までと長期に及ぶため、序章・中間章・終章の記述は本書の統一性を担保すると同時に、著者の最新の見解を示した部分として読めるだろう。こうした成り立ちゆえ、本書は多彩な議論を含む一方で、重複する内容も少なくない。以下では適宜簡略化を図りつつ、各章の概要を追っていきたい。

著者はまえがきで、本書の「主要な対象は運動や思想としてのアナーキズムそのものではなく、「アナーキズム的モーメント」である」と述べている。アナーキズム的モーメントは「狭義のアナーキズムのように正面から統治や支配を否定しようとする考え方に限らず、統治することにはたとえ民主主義であっても深刻な限界や自己矛盾、正当性の欠如などがあることを明らかにし、またこのような統治の限界や正当性の欠如には理由があることを承認するような、より広い思想的契機」であるとされ、互換的表現として「アナーキズム的なもの」も用いられる（1頁）¹。

これに続く序章では、アナーキズムとアナーキズム的なものの区別が詳しく論じられる。著者によれば、19世紀から20世紀にかけて存在した過去のアナーキズムと、反グローバリズム運動などに見られる現代のアナーキズムを容易に接続できないのは、「アナーキズムの概念が明確でない一方で、同時に固定観念

¹ 以下、本書からの引用は頁数のみを記す。

によって縛られている面があるから」である（13-14頁）。そのため「アナーキズム的な思想の意義を再検討するためには、アナーキズムを明確に自称する思想や運動だけではなく、それらを含むより広い裾野を研究の射程に入れることが重要」となる（14頁）。ここから著者は、ミハイル・バクーニンやピョートル・クロポトキン、大杉栄などに代表され、基本的に左翼の一派と目されてきた狭義のアナーキズムと、広義のアナーキズム（アナーキズム的なもの）を区別する。

アナーキズム的なものとしては、次の4種類が提示される。第1に、コスモポリタニズムや老荘思想、世界宗教など、狭義のアナーキズムが成立する以前の世界各地に見出される「アナーキズム的要素を有する諸思想」である。第2に、18世紀末から19世紀半ばのヨーロッパでゴドウィン、シュティルナー、ブルドンといった思想家たちが孤立的に展開した「初期アナーキズム思想」である。第3に、1960～70年代の社会運動以後に生じてきた、「なかばアナーキズム的性格を持つ民主主義運動」である。第4に、経済学における市場の重視や法学における自然法思想など、アナーキズム的主張に共感するかどうかとは無関係に生ずる「諸学問のなかのアナーキズム的モーメント」である。この延長では、近代の社会契約説において無政府という意味でのアナキーと想定される自然状態が呼び出されることや、グレーバーなどの人類学者が行ってきた国家なき社会の探究が言及される。

第1部には、アナーキズム思想史の概観と再解釈を行う第1章が収録されている。ここでアナーキズム的要素を含む諸潮流として言及されるのは、ポスト構造主義、ネオリベラリズムとアナルコ・キャピタリズム、新しい市民社会論、インターネットなどである。思想史的知見としては、理性の重視と感情の重視が混在しているアナーキズムの成立条件を、啓蒙の時代に求めている点が注目される。著者によれば、商業、社交、批評、コミュニケーション、親密圏など、それぞれ自律性を持った秩序ある空間が政治秩序を支えるという想定が形成されたからこそ、これらを否認する恣意的権力の支配を秩序の反対物と見なす批判が成り立つのであり、無政府を何より悪と見なす古典的政治学とは逆の思考

方法が可能になった。その思考を極地まで突き進めたのがバクーニンである。彼は比較的単純な疎外論に立つことで、人間の本来的な善性を制限している神・資本・国家の支配を覆すこと自体に意義を見出す。「こうして急進化されたヒューマニズムは破壊の陰謀を正当化し」、「見た目にはニヒリズムと区別のつかないものへと移行する」(60頁)。相反するような言説が同居するアナーキズムの多面性は、こうした経緯から説明できる。また、社会内部に遍在する権力という認識が一般化した現代では、留保のない権力批判を志向するアナーキズムが一種の「不可能性に囚われた思想」(66頁)になったとの診断は興味深い。

第2部には、ゴドウィンを論じた第2章とシュティルナーを論じた第3章が収録されている。フランス革命と同時期のイングランド急進主義に身を置いたゴドウィンは、トマス・ペインとは対照的に社会の善性を認めず、正義の秩序に先立つ自然権を否定する。彼の考える正義は人類にとっての効用を基準とするが、正義の秩序をもたらせるのは正しい知識に基づく個人的判断力だけである。ゴドウィンは偏見や模倣に満ちた社会に悪徳の源泉を見出し、政府も社会の悪を固定する存在だと見た。政府が一時の社会契約に拠って立つとしても、その公的判断が知識の増大とともに発展する個人的判断より倫理的に優越することはないため、さしあたり秩序維持を通じて効用に寄与する政府も、啓蒙の完成する未来にあっては不要とされる。また、判断力の基礎であると同時に悪の原因ともなるのが所有であり、過剰な富は墮落を生み出すため、自由な思慮の領域を確保する正義の要請に基づいて所有は制限されるべきである。このように個人的判断力を歪める政治制度と所有制度をともに批判する点にゴドウィンの特徴がある。

ヘーゲル左派の極限に現われたシュティルナーは、政治的自由主義と社会的自由主義(共産主義・社会主義)はいずれも何らかの道徳に基づく抽象的な精神の支配をもたらすと主張し、個人を超える民族や国家や人類が主体に滑り込む自由ではなく、現実の自己の欲求を享受する自己性を重視した。彼は社会的自由主義による万民の無所有化を批判したが、個人の力が及ぶ範囲の占有を所有と見ていたため、私的所有権を擁護したわけではない。シュティルナーによ

れば、社会は人間の本源的状态でありながら自己性の脅威であり、これに抵抗するには自己性と両立する限りで協力し合うエゴイストの連合を形成することが可能である。ただし連合は国家と同様に自由の制限を伴うし、常に社会へと逆戻りする恐れもある。シュティルナーに特徴的なのは、自己性を重んじる反面で自由の限定を不可避と考える「謙虚な」姿勢である。

中間章では、初期アナーキズムの現代性を読み解く補助線として、ソール・ニューマンのポストアナーキズム論が参照される。ニューマンは現代のラディカルな政治運動をアナーキズムとして解釈するにあたり、人為的な諸制度を取り去れば自然発生的に共同性が現われてくると考えていた本質主義的な啓蒙に代えて、権力に先立って解放されるべき何か普遍的な生があるという発想を退けるポスト構造主義との接続を主張する。これに対して著者は、ニューマンが評価するシュティルナーだけでなく、ゴドウィンやプルードンも単純に社会の善性や普遍的な人間性を信頼していたわけでないと言及する。初期アナーキズムをバクーニン以後のアナーキズムと切断し、ポストアナーキズムの萌芽を19世紀前半に見出すのが著者の創見だと言えよう。

第3部には、カール・マルクスを論じた第4章と、プルードンを論じた第5章・第6章が収録されている。マルクスの章が設けられているのは、「一九世紀半ばのアナーキズム的な思想家たちと共有する面も対立する面もともにあって、比較のために不可欠な思想家である」ことが理由だと説明されている(295頁)。真の民主政において政治的国家は消滅するとしたマルクスは、ボリス(政治社会)を超える市民社会の潜在力を見出し、国境を越える市場に規定された関係を捉える卓見で伝統的な政治学を踏み越えたが、ブルジョワジーのモダニズムを急速に前進させることで革命に至るという彼の期待は現実にはならなかった。

マルクスは目的にあたる社会革命(社会的なもの)と手段にあたる政治革命(政治的なもの)を接着する理路を詰められたわけではなく、その曖昧さからボリシェヴィキの出現を招いた。これに対してプルードンは、経済を考慮しないジャン＝ジャック・ルソーの人民主権論に見られるような権威の原理に基づく

統治を批判し、交換的正義を充足する公正で自由な競争に基づく経済の組織化を通じた、権力の社会への解消を説いた。私的所有は平等と相容れないが、拡大された私的所有としての共産主義もまた正義になかない。平等な個人間の相互性を実現する自由の原理を求めた彼は、労働者に集団目標への献身を強いるのではなく、あくまで自由な諸個人の分業による集合力の発揮を促そうとする。プルードンの議論は著作によって変遷するが、その根本には人間の有限性という認識があり、進歩は漸進的でしかありえないという確信から「革命らしくない革命」の主張が導かれたのである。

第4部には、タッカーを論じた第7章が収録されている。タッカーは19世紀末から20世紀初めのアメリカで活動した人物であり、プルードンなどに学びつつ、独占や国家を批判する個人主義的な社会主義の立場からアナキストを名乗った。彼はプルードンよりも私的所有に肯定的であり、権威と自由の対立も比較的単純に捉えていたが、資本主義に伴う問題を解決したり諸個人の権利を防衛したりする上で国家への依存を拒否したその思想は、20世紀後半になってアナルコ・キャピタリストのマレー・ロスバードに受け継がれ、リバタリアニズムの原点のひとつと見なされるようになる。

終章では、本書の意義として次の2点が挙げられる。第1に、初期アナキズムの実像を明らかにして、思想史叙述における適切な位置づけ直しを可能にしたことである。第2に、初期アナキズムが持っていたポスト革命思想としての性格に目を向け、現代のアナキズム的な諸思想を検討する際の批判的な照準点を提供したことである。

2. 位置づけと意義

2.1 思想史的貢献

本書最大の特徴は、19世紀後半以降の狭義のアナキズムではなく、それ以前の初期アナキズムに光を当てている点にある。ゴドウィンやシュティルナーはアナキストを自称していないし、プルードンは一時期の限定された文脈において、それもアイロニカルな仕方であナキストを名乗ったにとどまる。誰

一人として国家の即時解体を主張したわけでもない。三者は後のアナーキズム運動のなかで広く読まれ、先駆的アナキストとしての榮譽に浴するようになったものの、著者はそうした受容は取り扱わず、内在的・同時代的な読解に終始している。

ニューマン批判として既に触れたが、狭義のアナーキズム（やマルクス主義）と切り離れた初期アナーキズムに知的価値を見出し、その現代性を示す点に本書の独自性がある。ここからは、アナーキズム再評価の文脈でも有用なのはむしろ初期アナーキズムの方だという含意を導けるだろう。資本主義の内部に公正や正義を求める動きがプルードンの主張に近い考え方の再生とされるように（67-68頁、217頁）、アナーキズムの社会主義的色彩を薄める方向に作用する解釈が示されているとも言える²。

著者が言うように、「現在でも一九世紀の社会思想史、社会運動の思想史の通史的叙述にあっては、マルクスとエンゲルスによって作られた視点から初期アナーキズム思想の意義と限界が語られていることが多い」（288頁）。本書はこうした思想史叙述の修正に寄与するだろう。近年シュティルナーの内在的な研究が増えつつあるし、プルードンについても、やはりアナーキズムの文脈を離れて内在的に読み解く著作が現われた（金山 2022）。これらと本書を併せ読むことで、初期アナーキズムに対する理解は大幅に向上するはずである。

本書のもうひとつの特徴は、タッカーやロスバードに目を配ることで、急進左翼の一派と見なされがちだったアナーキズムを、リバタリアニズムとも連続的に理解できるようにした点である。初期社会主義やマルクス主義との関連で狭義のアナーキズム（社会主義的アナーキズム）に関心が注がれやすかった日本では、後のリバタリアニズムに流れ込むような知的潮流は相対的に軽視されてきた³。この歪みを正す本書の議論は、アナーキズム（的なもの）の豊かな広がりをも再認識させてくれる点で意義深い。その一方で著者は、次のような問題

² 他方、マルクス解釈の文脈では、マルクスとアナーキズムの近さが再注目されるようになってきている（隅田 2023）。

³ ただし、少数ながら研究は存在する（仁井田 2012）。

も指摘する。すなわち「英語圏を中心にした政治哲学にあってアナーキズム思想的な契機は無視されているわけではなく、近年のリバタリアニズムやアナルコ・キャピタリズムなどの関連もあって、一つの極端な立場として参照されることもあるが、歴史的な観点を欠いていることが多い」(288頁)。本書はアナルコ・キャピタリズムに繰り返し言及したり、ブルードンとフリードリヒ・ハイエクに親近性を見出したり(217-218頁)、ファシズムとアナーキズムの共通性に注意を促したりする(53頁)ことで、アナーキズムが左右対立を横断する立場であることを強調している⁴。アナーキズムのどの面に関心を抱くにせよ、非歴史的な立論によるバイアスや錯誤を避けるためには、本書の思想史的知見を摂取することが望ましい。

2.2 理論的貢献

さらに狭い意味の思想史研究にとどまらない理論的貢献として、アナーキズムとアナーキズム的なものの区別を挙げるべきだろう。この区別の導入は、過去にアナーキズムとして語られてきたものだけでなく、それらと異なりつつ近い距離にあるもの、直接の関係はないが論理的な近さを見出せるもの、現代になって登場してきたものなど、かなり広範な思想や運動をアナーキズムと結びつけて語ることを可能にした。このように特定の概念やイデオロギーと関連する幅広い言説を緩やかに包摂して議論することは思想史的な手法の一種とも言えるが、知的豊かさゆえに捉えがたいアナーキズムについて、人びとの直観と乖離しすぎず理論的把握を行うために有効なアプローチだと考えられる。

上記の区別はアナーキズムを多様な言説と結びつけることへの寛大さの反面、アナーキズムそのものの攪乱を予防する慎重さを帯びている。著者の議論に倣うなら、私たちが何らかの言説をアナーキズムと呼びたいと思った場合も、それはアナーキズム的なものと呼ぶ方が適切かもしれない。そうだとすれば近年

⁴ 著者は1960～70年代におけるニューレフトの登場が持つ歴史的意味を重視してきたが、本書267頁でも触れられている通り、ニューレフトとリバタリアニズムには一定の連続性が認められる。

流行している思想も、あくまでアナーキズム的なものにすぎないと言えそうである。しかし、アナーキズムとアナーキズム的なものを選び分けるだけでは、アナーキズムそのものの理解はいつまでも進展しないのではないか。もちろんアナーキズムそのものの理解は本書の主眼ではないと明言されており、これは著者の責任ではない。とはいえ、アナーキズム的なものが隆盛する反面でアナーキズムそのものの概念が不明確な現状は、理論的課題の所在を示しているだろう。

この点にかかわって、次のような著者の洞察は重要である。すなわち「ニューレフトに刺激された新しい社会運動が出現したあとの社会空間は、それまで考えられなかった多様な差異が承認され」たため、いわば「アナーキズム的な特徴が民主主義運動一般に拡散」し、その結果として「アナーキズムに固有な考え方の輪郭は曖昧になった」(24頁)。これはいわばアナーキズムの勝利が生んだ敗北である。実際にアナーキズムのラベルとともに展開される近年の言説には、わざわざアナーキズムを名乗る必然性が疑わしいものも少なくない。アナーキズム的なものが浸潤した言論空間では、アナーキズムが主張しうる固有の意義は見失われ、表面上の興隆とは裏腹に、アナーキズムそのものは消えかかっているかもしれないのである。歴史的に限定された狭義のアナーキズムを超えて、現代も通用する独立した理論的立場や政治イデオロギーとしてアナーキズムを捉え直す作業は積み残されている。

3. 論点

3.1 政治的なものと正義

以下では本書から引き出せる3つの論点について、主に理論研究を専門としてきた評者なりのコメントを付したい。まず、「政治を成り立たせながら、通常政治によっては覆い隠されるような契機」(4頁)としての「政治的なもの」がアナーキズム(的なもの)と取り結ぶ関係についてである。著者はこれまでも政治的なもの(と社会的なもの)に繰り返し論及してきた。本書を読むと、そうした関心が初期アナーキズム研究と密接に結びついていることを理解できる

(第3部では明示的に述べられてもいる)。

その関係は端的に言えば正義論として提示されている。本書では社会契約説における自然状態(アナーキー)の意味がたびたび言及される。国家の主権と個人の自由のあいだで生じる対立を背景に描かれる初期アナーキズムは、いわば非主権的な秩序の探究としての性格を持つ。著者は『政治的正義』を書いたゴドウィンや『革命と教会における正義』を書いたブルドンを、社会契約説からスコットランド啓蒙を経た「古典的正義論の最後に位置」として見ている(166頁)。彼らの正義論は具体的には所有の問題にかかわっており、ジョン・ロールズ以降の現代正義論とも無関係ではない。初期アナーキズムは「近代社会哲学の(あるいは最後の)継承者であったゆえに、同時に近代社会哲学の内的矛盾や限界を明らかにすることも可能だった」という評価の高さに、驚く読者もいるかもしれない。だが、そうした印象こそ旧来の思想史叙述の産物であろう。

著者は正義論としてのアナーキズムを、「なぜ国家が必要なのか、国家の暴力は正当化されるのか、国家の代わりとなるような社会関係はあり得るのか、といった根本的な問い」に取り組む思想だと見ている(4頁)。それゆえアナーキズム(的なもの)の検討は、政治的なものを考察する上で、ひいては政治学の存立にとって、欠かすことができない。実際に英米系の政治理論では、アナーキズム(的なもの)が政治的権威や正統性の問題系として大いに検討されている。主に思想史や運動史で取り組まれてきた日本のアナーキズム研究は、こうした理論的成果を旺盛に受容しているとは言えず、本書でも直接は触れられない。政治的アナーキズムとかかわりが深い批判理論や現代思想と、哲学的アナーキズムが扱われる分析哲学が十分に架橋されていないという背景も無視できないだろう。思想史的に正義論としてのアナーキズムを描いた本書に対応する、理論的なアナーキズム研究の発展が俟たれるところである。

3.2 批判対象としての国家

アナーキズムの理論研究を展望する際に浮上するのが、国家を特別視するこ

との是非である。著者によるアナーキズム（的なもの）の理解は、政治学者らしく、一貫して国家との距離感を基軸にしている。「アナーキズムは必ずしも国家だけを批判の対象とするわけではない」ことは著者も認めているが、議論を進める上で強調されるのは、「国家の批判や国家のない社会を構想することはアナーキズムの主要関心であり続けてきた」との把握である（25頁）。これに疑問の余地はないが、アナキーが無支配を意味すること、非国家的な諸権力による支配もありうることを考慮して理論的な見地から言えば、アナーキズムはあらゆる支配に対する批判や拒絶を基軸にして理解するべきであり、国家の批判・拒絶を格別に重視することは妥当性を欠くのではないか、との疑念が生じる。

この点に関連して、本書が20世紀における「芸術や文学の領域におけるアナーキズム的傾向」を視野に収め、それらが「反政治というよりむしろ公式的な「政治」で見失われた別の「政治」、ミクロな領域の「政治」の発見」を担っていたとの理解可能性を示しながらも（22頁）、それ以上の検討を行っていないことは惜しく感じる。たとえば日本にも多数存在したアナーキズム的傾向を持つフェミニストたちは、国家だけでなく家庭やセクシュアリティに関する支配も排撃すべき対象と捉えていた。アナーキズムが持つ魅力の一面は、このようにマクロな政治かミクロな政治かを問わずに支配一般を批判・拒絶しようとする点に求められるのではないだろうか（これに近い評価は著者も65頁で述べている）。

もちろん国家との距離感を基軸にしないことは、アナーキズムの概念をますます不分明にしてしまう恐れがあり、他の政治イデオロギーとの差別化も難しくするかもしれない。しかしグローバル資本主義の高度化とともにアナーキズムが再注目されるようになった事実を踏まえると、主権国家だけでなく多様な統治や支配の形態をすべて批判・拒絶する志向性を固有の意義として認めることが、アナーキズムの概念を明確化する上で重要なのではないか。もとより遍在する権力の全廃が不可能だからといって、権力に抵抗して可能な限りの制御を試みることは無意味にならない。むしろ「不可能性に囚われた思想」として

のアイデンティティを積極的に引き受けることが、アナーキズムそのものにとつては有益であろう。

3.3 現代におけるヴィジョン

最後に、将来にわたるアナーキズム的モーメントの展望についてである。著者は現実政治に対する鋭い分析を行ってきたことでも知られる。それゆえ著者のアナーキズム論と現代政治分析の関連に興味を惹かれる読者もいるだろう。本書は現代における何らかのオルタナティブを提示する目的を持たないと断っているものの、ひとつの政治観を提供する材料として、初期アナーキズムが革命に対して批判的距離を保ったことをクローズアップする。マクロな政治とは異なる領域に秩序の実質を見出そうとする初期アナーキズムのポスト革命思想としての性格は、グローバル資本主義の秩序を「転覆に賭けるのではない仕方」(293頁)で長期的につくり替えていく可能性へと重ね合わせられる。

ここに示される漸進的な進歩の見通しは、アナーキズムの衝動的なイメージとは正反対の、かなり気が長いものである。現代のアナーキズム運動でしばしば語られる予示的政治 (prefigurative politics)、つまり将来に展望される自由な生のあり方を今ここで体現しようとする考え方とも同じではない。戦後日本における「革命の影」(同)に触れながら、何らかの革命に期待を抱く立場と距離を取る政治観を提出する本書の締めくくりは、印象的である。しかしながら長期的・漸進的に秩序をつくり替えていく可能性に賭けるとしても、どのような秩序を新たに形成しようとするのか、何らかの方向性を示す必要はあるだろう。そのヴィジョンを本書は提示しておらず、これもまた理論家の課題として引き取られなければなるまい。

おわりに

若干の積み残された課題を指摘したものの、本書がアナーキズム研究の稀有な業績として持つ意義の大きさは特筆して余りある。さらに既発表論文をまとめた本書の性質を考慮すると、著者のアナーキズム論がこれに尽きているとは

考えられない。著者自身も「現代の政治思想について論じることは本書の目的ではなく、これについては別の機会を考えている」(287頁)と述べているように、政治思想としてのアナーキズムに関する著者の続編に期待を抱くことは許されるだろう。

アナーキズムが実践を重視するからこそ、実践と距離を置いたアカデミズムの立場からアナーキズム(的なもの)の実像を冷静に解明しようとする著者の仕事は、幅広く参照されるべき価値を有している。本書に続くような研究がいくつかわれる状況になれば、日本の政治学においてもアナーキズムが一定の地位を占めるようになるはずである。

【引用文献】

金山準(2022)『ブルードン——反「絶対」の探求』岩波書店

隅田聡一郎(2023)『国家に抗するマルクス——「政治の他律性」について』堀之内出版

瀧川裕英(2017)『国家の哲学——政治的責務から地球共和国へ』東京大学出版会

仁井田崇(2012)「19世紀アメリカにおける個人主義のアナーキズム——ライサンダー・スプナーとベンジャミン・タッカーをめぐる」『名城法学』62(2):53-89

(まつお りゅうすけ)

(2024年1月4日受理)